

利便性と郷愁のはざま —タイの古書店事情—

櫻田 智恵

販売されている本も、時折掘り出し物があるものの、外国語の本や小説などの一般書籍が主である。地方都市でも同様に古書店数が減っているようで、地方からバンコクに古書を探しに来る研究者が多い。では、消えた古書店は、一体どこに行ってしまったのだろうか。

●オンライン古書店の登場

結論からいうと、古書店の多くはオンライン上に移動してしまった。ネット販売だけを請け負う古書店は、二〇〇一年頃から登場し始め、ここ五年ほどの間にその数を増やした。彼らは普段店舗を構えていないものの、依頼すれば、保管している古書をみせてくれることもある。

ネット販売に転向した理由として、半屋外の市場で古書を販売するのは商品の劣化が激しく、管理が難しいこと、頻繁に人の手が触れることで破損する商品が多いことなどを挙げる店主が多い。

オンライン上の古書店では、出版元から直接買い取ったり、個人から譲り受けたりして品数を増やしている。おそらく、『葬式本』であれば寺院周辺や収集家から、官庁内部の本は個人的なつてを使

はじめ、『葬式本』などの非売品が含まれる。研究者が特によく購入するのは、おそらくこの『葬式本』だろう。筆者も、みつけると欲しくなってしまう本である。

「葬式本」とは、その名のとおり「葬式で配られる本」であり、亡くなった人物の来歴、家族構成、弔辞、思出の写真等で構成されている。人によっては、自身の論文や、高僧の説法を掲載したりする。昔は、身分の高い者や偉業を成し遂げた者の功績を讃えて製作されていたが、近年では、作りた者は誰でも作るし、両親の法事に合わせて新たに製作する者も多い。この『葬式本』は、公的資料にはない「裏話」が掲載されていることがあり、研究資料としては欠かせないものになっている。

三月末のある日、巨大なブックフェアが開催されていると聞き、タイ人の友人と行ってみることにした。待ち合わせ場所には、遅刻の友人が、すでに大きなキャリーケースと共に待っていた。聞くところ「買った本を入れるケースだ」という。どれだけ買うつもりだと、半ば呆れ気味で会場に向かった。しかし、帰る頃には筆者自身も、大量の古書と『葬式本』を抱え、ケースどころか袋さえ持参しなかったことを呪う羽目になった。

●タイの「古書」

話しは少し逸れるが、ここでタイにおける「古書」について確認したい。タイにおいて「古書」は、大きく三種類に分かれる。ひとつは「中古の本」。そして「古い本」。この他に「希少本」があり、このなかには、省庁内部の配布資料を

●消えゆくバンコクの古書店

こうした「古書」を扱う店舗は、年々減少しているように感じる。一〇年ほど前は、バンコク市内でもいたる所に「貸し本屋」と「古書店」がみられたし、各大学の周辺には、路上古書屋が多かった。特に、官公庁が集中するエリアにあるタマサート大学周辺では、一般に流通しない省庁内部の古く貴重な資料が売られていることもあり、論文の要になる情報が手に入ったという研究者も少なくない。

つい最近まで、最も古書店が集中していたのは、チャトゥチャック週末定期市の古書エリアであった。これは、王宮前広場の週末定期市の移転にもない、法務省前に展開していたバンコク唯一の古本市場が、一九八二年に移動してきたものである。現在では、この書店数は年々減少傾向にあり、

って入手しているのだろう。しかし、ほとんどは他店で購入した本を転売しているという。ここに近年の古書の値上がりの要因があると考えられるが、相関は明らかでない。ただ、店主の話から聞いて明らかなのは、問屋的古書店が存在するということである。そのひとつが、ドゥワンカモン古書店である。

● 巨大な古書店、ドゥワンカモン

ドゥワンカモン（通称DK）の創業は、一九七二年。創業者は、スック・スーンサワーン氏とそのドイツ人妻である。読書好きだった妻のために本の収集を始め、蔵書数が膨大になり販売業を開始。その後、当時では珍しかった、印刷・出版から販売までを一手に担う形態で急成長を遂げた。一九八〇年代には店舗数を急増させたが、一九九七年のアジア通貨危機の影響で破綻に追い込まれた。最盛期には全国に一〇〇以上店舗をもち、バンコク郊外には五〇〇〇平方メートル規模の巨大な店舗を所有していたが、月に一〜五店舗のペースで閉店をすすめて、二〇一四年頃には書店事業から撤退した。

しかし撤退を進めるにつれ、未販売の書籍の保管場所が無いという問題が浮上してきた。そこで、DKが所有するホテルのうち、ナコーンサワーン県にある一カ所を選定して保管庫に改装、ネット上での販売を行う「古書店DK」として生まれ変わった。

二〇〇七年に創業者が亡くなったからは、その孫が二〇名の従業員と共に古書店を管理している。現在は、タイ語書籍四億冊、英語書籍一億冊もの古書を保管しているらしく、ホームページで所蔵リストを公開し販売もしている。ここに問い合わせると、「希少本」もほぼ入手可能で、さらに関連資料を紹介してくれることもある。タイの古書を探している人は、問い合わせしてみると収穫があるかもしれない。

● 自分で探して、触って、買う魅力ーブックフェア

便利な時代になった。今や、「希少本」も、タイに足を運ぶまでもなく、インターネットで購入できるようになった。外国人研究者にとって、これほどありがたいことはない。しかし、何となく寂しさを感じているのは筆者だけだろう

か。山のように詰まれた、古い紙の少しすえた臭い。沢山の本を、時間をかけて自分の手に取り、面白そうな本と偶然出会ったときの興奮。そういう感動が、今も時折恋しくなることがある。古書を探すとき、利便性と郷愁との間で心が揺れ動くのを感じる。

そんな古書を愛する者にとって、ブックフェアは特別な意味を持つ。ブックフェアは毎年三回行われているが、最大規模といえるのは、四月二日の「読書愛の日」を含む三月末から四月頭にかけて開催されるものだろう。東京ドーム約一・五個分の敷地全体に展開する会場を人々が埋め尽くす。

このブックフェアは一九七二年に始まり、二〇〇九年に閣議決定した読書一〇カ年の方針によって、現在の規模にまで巨大化した。これは、読書による学力強化を目的に政府が定めたもので、「読書愛の日」も同時期に設定された。四月二日は、現国王の次女シリントーン王女の誕生日であり、王女が勤勉でよく読書をする事にちなんでいる（参考文献①）。ブックフェアの出店者は、大手出版社やマンガ専門店をはじめ、近年増加傾向にある「独立系書店」

も多くみられる。各書店は、大幅値引きや、作家のサイン会などで消費者の購買意欲を掻き立てる。そして、ここはとりわけ古書を愛する者の興奮を呼び覚ます。

それはなぜか。普段は店舗を構えないインターネット上の古書店が、ここぞとばかりに出店するからである。店舗名が不明でも心配することは無い。古書店に並んでいる本は、どこか染みがあったり、表紙が変色したりして、すぐにそれとわかる。普段は手に入らない『葬式本』も、新品同様の美しさで販売されている。じっくりと、心ゆくまで自分の手に取り古書を選べばよい。そんなブックフェアは、古書を直接選ぶ興奮を味わえる、最後の場所なのかもしれない。

（さくらだ ちえ／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

《参考文献》

- ① 教育省大臣局「大臣局ニュース128/254」二〇〇九年（<http://www.moe.go.th/webasm/2011/apr/128.html>）。
- ② ドゥワンカモンDKBook（<http://www.thaidk.com/>）。